

2016年3月30日

政策研究レポート

子育て支援策等に関する調査 二次分析

(2) 父親の育児に対する評価と個別育児行動との関係性分析

経済・社会政策部 研究員 井下 晶雄

本レポートの位置づけ

- ・本レポートは、三菱UFJリサーチ&コンサルティングが2014年6月に実施した「子育て支援策等に関する調査2014」の追加分析の位置づけとなる。当該調査は「未就学児の父母調査」と「中高生調査」の2つから構成されており、本レポートでは、そのうち「未就学児の父母調査」の結果を用いて、父親の育児における個別行動と父親の育児に対する母親の評価との関係性について、分析を行っている。「子育て支援策等に関する調査2014」の詳細については、以下のページを参照いただきたい。

http://www.murc.jp/publicity/press_release/press_141208

レポート概要

- ・父親の育児参加に対する社会的関心が高まり、父親の育児時間が少しずつ改善傾向を示している中で、父親の育児に対する母親の期待や評価は伸展していない。本レポートでは、「父親がどのように育児参加をしたら、母親の高評価を得ることができるのか」を検討することを目的として、父親の育児における個別行動と父親の育児に対する母親の評価との関係性について分析を行った。また本分析に先立ち、父親の育児に対する母親の評価と生活満足度（ワーク・ライフ・バランス、父親との関係）との関係性についても分析を行った。
- ・分析結果から得られた示唆は以下のとおりである。
 - ・父親の育児に対する母親の評価が高くなると、母親の生活満足度（ワーク・ライフ・バランス、父親との関係）も向上する関係性となっていた。
 - ・育児への取組みが十分であると考えられている父親は、日常的な育児（子どもと遊ぶこと、子どもの日常的な世話をすること等）にきちんと取り組んでいた。逆に、育児への取組みが不十分であると考えられている父親は、これらの日常的な育児に対して不満を抱かれていた。
 - ・育児への取組みが十分であると考えられている父親は、育児に対して前向きに関わっており、非日常的な育児（子どもが病気の時の世話、イベント・行事への熱心な参加等）にも積極的に取り組んでいた。
 - ・育児への取組みが不十分であると考えられている父親は、育児に係る夫婦間のコミュニケーションに課題がある傾向が示されていた。
 - ・育児への取組みが十分であると考えられている父親・不十分であると考えられている父親ともに、「生活態度」に関する改善余地が大きいことが結果として示されていた。

1. はじめに

女性の社会進出や共働き世帯の増加、男性のワーク・ライフ・バランスに関する価値観の変化などを背景として、父親の育児参加に関する社会的関心は着実に高まりをみせている。

父親の育児参加の実態にも少しずつ変化が生じてきており、父親の育児時間もわずかながら増加傾向を示している¹。また、国立社会保障・人口問題研究所が実施した「第5回全国家庭動向調査」によると、夫婦間における父親の育児分担の割合は、第2回調査（1998年実施）から少しずつ増加しており、第5回（2013年実施）時点で、父親が約2割、母親が約8割となっている²。依然として母親の分担割合は高いものの、少なからず父親の育児参加が積極化している状況がうかがえる。一方で、同調査では、父親の育児に対する母親の期待と評価についても調査が行われているが、期待・評価ともに第4回調査（2008年実施）と比べて第5回調査（2013年実施）の数値が低下していることが示されている³。特に、父親の育児に対する母親の期待については、「期待する」と回答した母親の割合が約6割（第4回）から約5割（第5回）に減少しており、父親の育児に対する期待値が下がっていることが読み取れる。

父親の育児時間や育児分担割合が改善傾向を示す中、母親からの父親の育児に対する期待や評価が向上していない背景には、どういった課題が隠されているのだろうか？父親の育児時間や育児分担割合が改善したとしても、父親の育児参加の方向性が、母親の期待する方向に向いていない場合、母親からの評価を得ることは難しいだろう。父親の育児に関する社会的関心が高まり、父親が育児に関わる時間が少しずつ伸びている中で、かえって母親たちには父親の育児参加が自分たちの望む方向に進んでいない、期待するほどには水準が上がってこないことに対するもどかしさがあるのかもしれない。

本レポートでは、「父親がどのように育児参加をしたら、母親の高評価を得ることができるのか」について検討を行うことを目的として、父親の育児における個別行動と父親の育児に対する母親の評価との関係性について分析を行うこととする。具体的には、「父親の育児に対する母親の“総合評価”」と「父親の個別育児行動に対する母親の“個別評価”」との関係について分析を行い、総合評価を高めるために有効となる個別育児行動の特定を試みる。

¹ 「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）レポート2014」によると、6歳未満の子どもをもつ夫の1日あたりの育児・家事関連時間は60分（2006年）から67分（2011年）に増加している。

² 「第5回全国家庭動向調査」によると、妻と夫の間での育児分担割合の平均値は、第2回調査（1998年）時点では「妻84.5%、夫15.5%」の分担割合だったが、第5回調査（2013年）時点では「妻79.8%、夫20.2%」の分担割合となっていることが示されている。

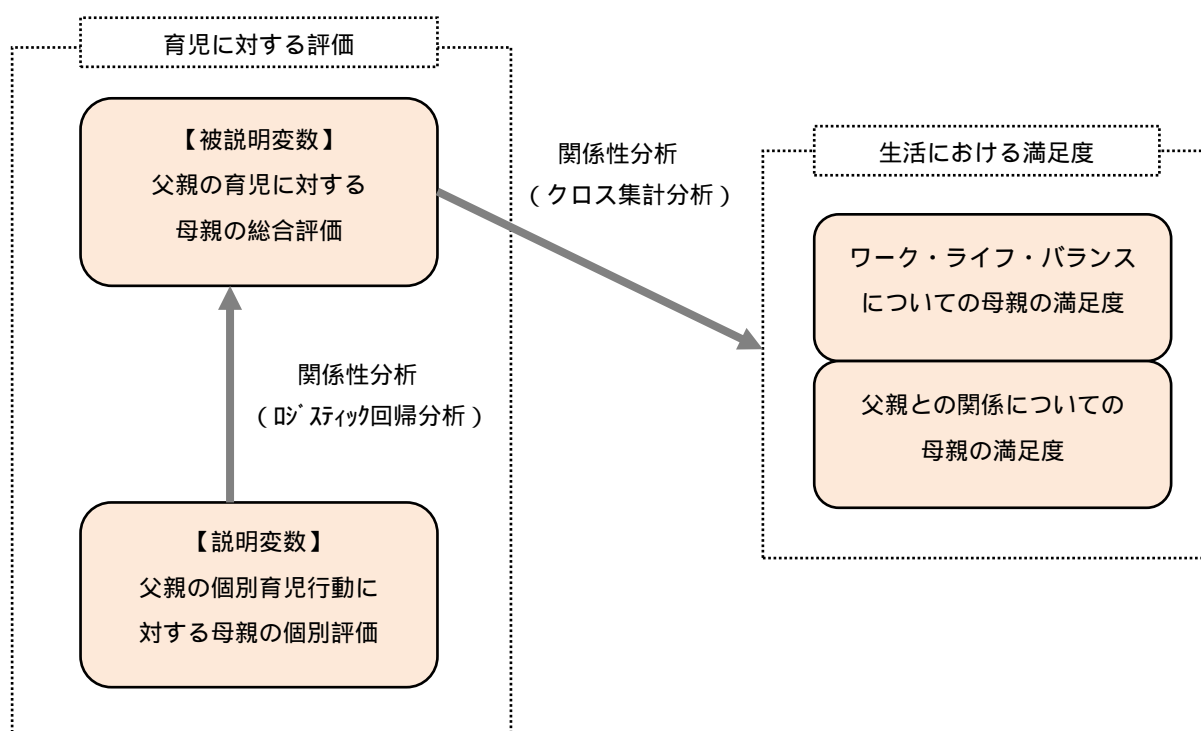
³ 「第5回全国家庭動向調査」によると、夫の育児に対する妻の期待について、「期待する」と回答した妻の割合は、第4回調査（2008年）の62.2%から第5回調査（2013年）の53.5%に低下したことが示されている。また、夫の育児に対する妻の評価について、「満足」と回答した妻の割合は、第4回調査（2008年）の60.7%から第5回調査（2013年）の58.4%に低下したことが示されている。

2. 分析の枠組みと使用するデータ

本レポートに使用するデータは、三菱UFJリサーチ&コンサルティングが2014年6月に実施した「子育て支援策等に関する調査2014（未就学児の父母調査）」となる。この調査は、未就学の子を持つ父母4,000名（父親2,000名、母親2,000名）を対象に実施された調査であり、ネットモニターを対象としたウェブアンケート調査である。主な調査項目として「子育てについての意識、子どもの育ちと子育て支援環境、子育てにおける父母の役割分担、仕事と子育ての両立の状況、基本属性」などについて調査を実施している。

本レポートでは、上記調査で把握した項目のうち、「父親の育児に対する母親の総合評価」を被説明変数とした「二項ロジスティック回帰分析」を行うことにより、父親の育児に対する母親の評価を高めるために有効となる個別育児行動の特定に取り組んでいる。また、上記回帰分析に先立ち、「父親の育児に対する母親の総合評価」と「ワーク・ライフ・バランスについての母親の満足度」「父親との関係についての母親の満足度」との関係性についても分析し、育児に対する評価の改善が生活における各満足度の向上に影響を及ぼすことを確認する。各項目間の関係性や分析の枠組みは、図表1のとおりとなる。

【図表1】各分析項目の関係性および分析の枠組み



3. 分析結果

(1) 個別データの確認

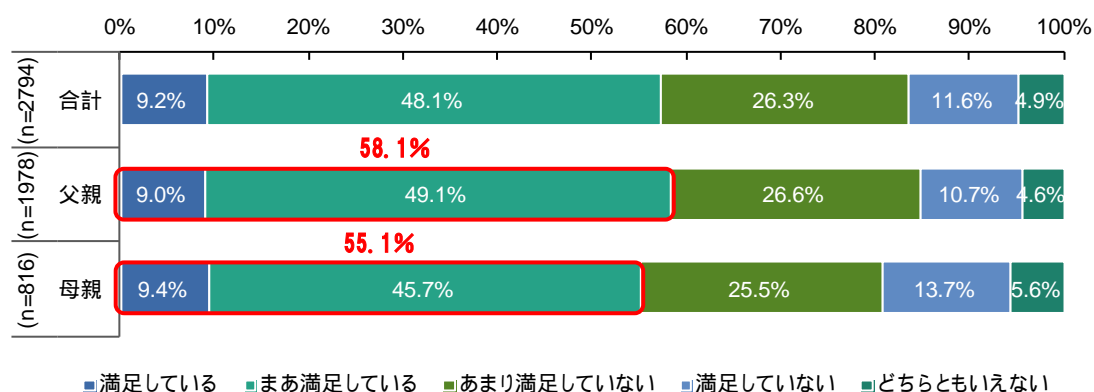
ここでは、「子育て支援策等に関する調査 2014 (三菱UFJリサーチ & コンサルティング)」データに基づき、分析に使用する各データ(ワーク・ライフ・バランスについての母親の満足度、父親との関係についての母親の満足度、父親の育児に対する母親の総合評価、父親の個別育児行動に対する母親の個別評価)について整理を行う。また、父親の育児に対する母親の評価の背景となる「父親の育児状況(=父親が担っている育児)」についてもあわせて確認を行うこととする。

はじめに、「ワーク・ライフ・バランスについての母親の満足度」「父親との関係についての母親の満足度」の状況について確認する(図表2・3参照)。

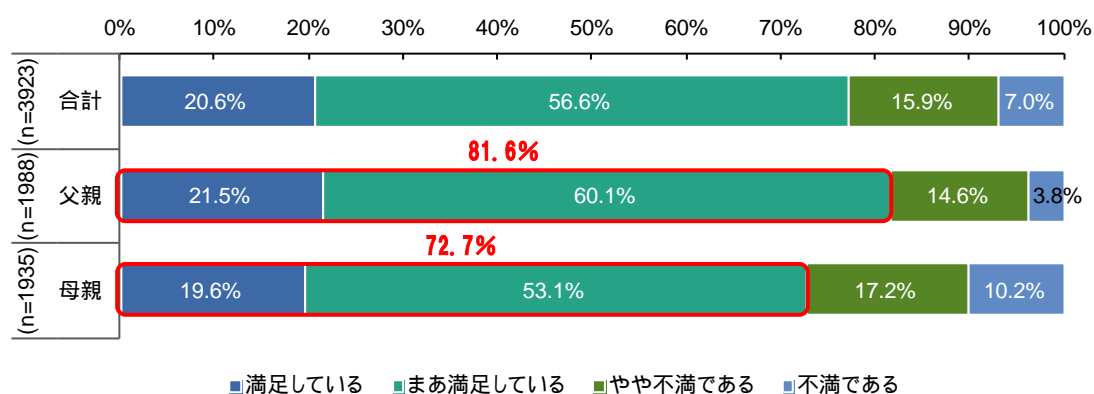
父親は自身のワーク・ライフ・バランスについて、58.1%の人が「満足している」「まあ満足している」と答えている。一方で、母親が自身のワーク・ライフ・バランスについて「満足している」「まあ満足している」と答えた割合は55.1%で、父親よりも若干低い割合となっている。

また、父親が配偶者・パートナー(母親)との関係に「満足している」「まあ満足している」と答えた割合は約8割であったが、母親が配偶者・パートナー(父親)との関係に「満足している」「まあ満足している」と答えた割合は約7割にとどまっており、父親と比べて約9ptの差が生じている。

【図表2】ワーク・ライフ・バランスについての満足度



【図表3】配偶者・パートナーとの関係についての満足度

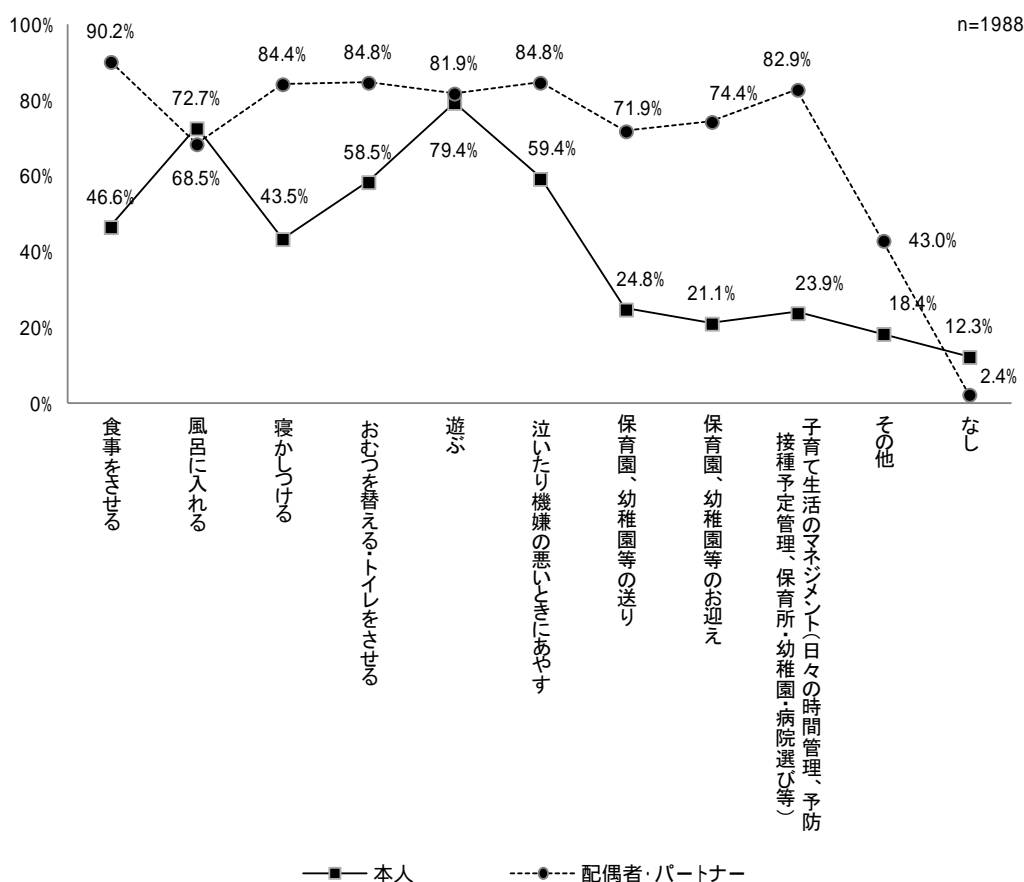


次に、「父親の育児状況（＝父親が担っている育児）」について確認する（図表4・5参照）。

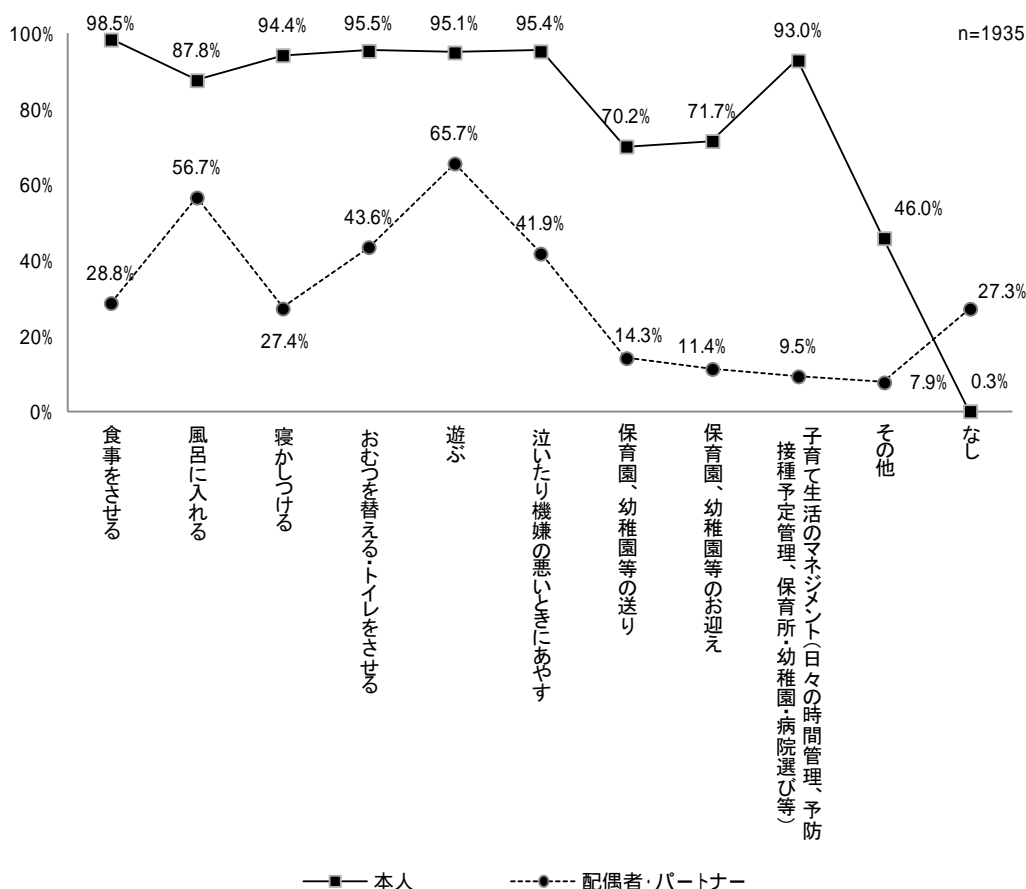
父親自身が担っていると考え、また、母親が配偶者・パートナー（父親）が担っていると考えている育児で最も多いものは、ともに「遊ぶ」（79.4%、65.7%）であった。また、「風呂に入れる」「泣いたり機嫌の悪いときにあやす」「おむつを替える・トイレをさせる」など、日常的に発生する子どもの世話についても、一定程度、取り組んでいる状況がうかがえる。

一方で、「保育園、幼稚園等の送り・迎え」や「子育て生活のマネジメント」については、父親自身および母親が配偶者・パートナー（父親）が担っていると考えている割合ともに低い水準となっている。これらの取り組みについては、父親がまだ十分に関わっておらず、母親が担う割合との差も大きくなっている。

【図表4】父親本人および配偶者・パートナー（母親）が担っている育児



【図表5】母親本人および配偶者・パートナー（父親）が担っている育児



最後に、「父親の育児に対する母親の総合評価」と「父親の個別育児行動に対する母親の個別評価」について確認する（図表6・7参照）。

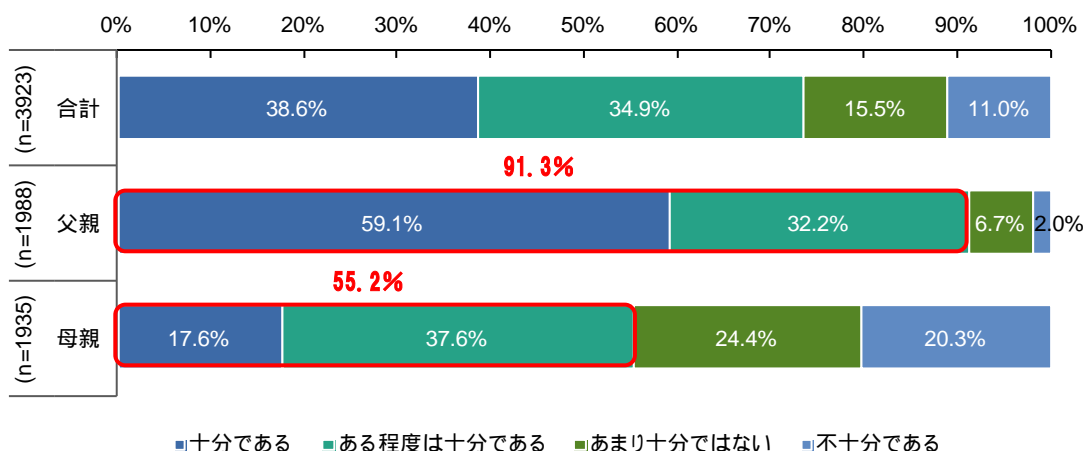
父親は配偶者・パートナー（母親）の育児への取組みについて、9割以上の方が「十分である」「ある程度十分である」と考えている。一方で、母親が配偶者・パートナー（父親）の育児への取組みについて「十分である」「ある程度十分である」と考えている割合は、5割程度に留まる。特に、「十分である」と考えている割合について差が大きく、父親・母親間で40pt以上の差が生じている。

また、母親が配偶者・パートナー（父親）の子育てについて評価している点として最も多く挙げているのは「子どもとよく遊ぶ」（44.7%）で、次いで「子どもの日常の世話をする」（31.4%）、「誕生日などのイベント、保育園・幼稚園などの行事に熱心に参加する」（19.8%）であった。一方、子育てについて不満な点として最も多く挙げているのは「子どもの模範となる生活態度をとる」（32.0%）で、次いで「子どもの日常の世話をする」（16.3%）、「子どもとよく遊ぶ」（15.8%）であった。

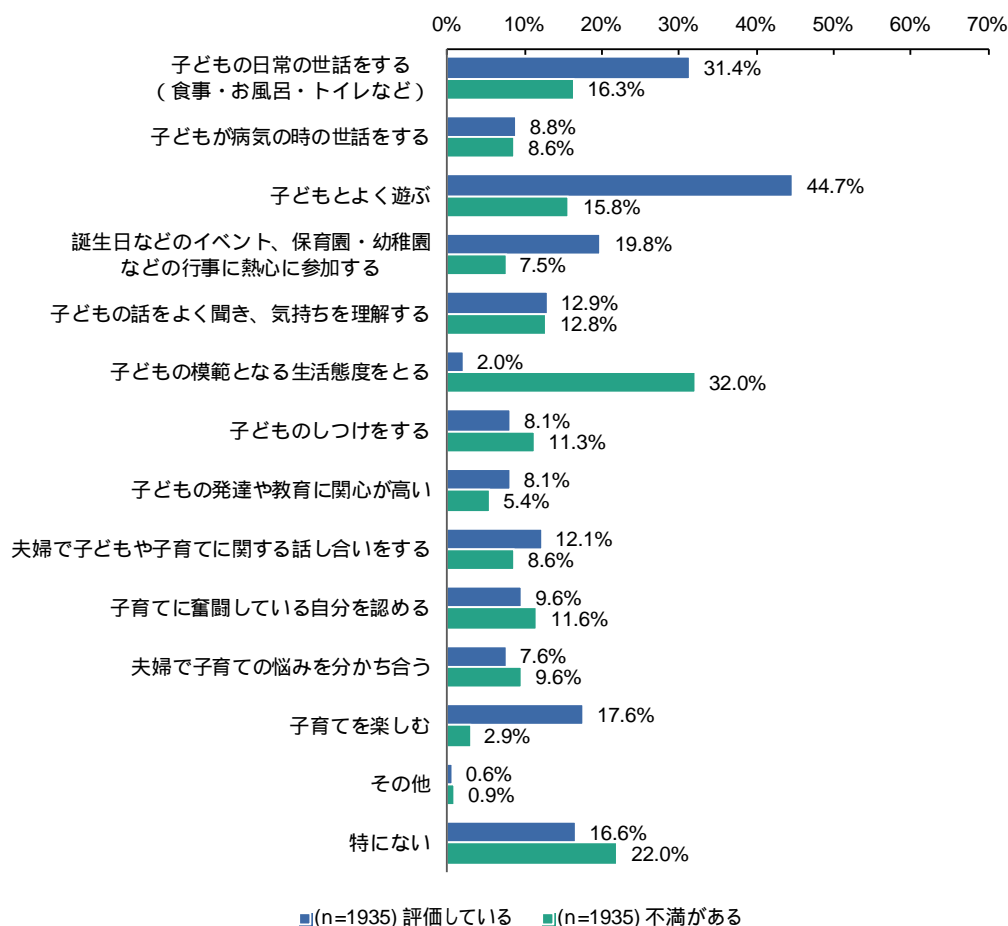
「子どもとよく遊ぶ」「子どもの日常の世話をする」などの日常的に生じる育児については、父親に対する評価が高い一方で、不満も一定程度存在しており、これらの取組みに対する父親への期待の裏返しとして、母親が考える水準に至っていない場合に不満に転じている状況がうかがえる。

なお、「評価している点は特にない」「不満な点は特にない」と答えた割合もそれぞれ一定水準以上に達しており、まったく評価できる点がない・まったく不満な点がないという両極に位置する父親が、それぞれ一定程度存在していることがうかがえる。

【図表6】配偶者・パートナーの育児に対する総合評価



【図表7】父親の個別育児行動に対する母親の個別評価



これまで、母親の生活満足度（ワーク・ライフ・バランス、父親との関係）、父親の育児状況（父親が担っている育児）、父親の育児に対する母親の総合評価・個別評価の状況について確認してきた。

依然として、育児において中心的な役割を担っているのは母親であり、母親の生活における満足度は

父親と比べて低いこと、父親の育児への取組みに対して不満を持っている母親が半数程度いることなどが分かった。また、父親の育児に対する不満点として、父親本人の生活態度や日常的な育児行動などを挙げる母親が多いことも分かった。

それでは、母親から育児への取組みについて十分であると考えられている父親は、どういった点が評価されているのだろうか？逆に、十分でないと考えられている父親は、どういった点に不満を抱かれているのだろうか？以降では、「父親の育児に対する母親の総合評価」と「父親の個別育児行動に対する母親の個別評価」におけるそれぞれの項目との関係性について、統計解析を用いて分析を行うこととする。また、上記分析に先立ち、「父親の育児に対する母親の総合評価」と「ワーク・ライフ・バランスについての母親の満足度」「父親との関係についての母親の満足度」との関係性についても分析し、育児活動の見直し・総合評価の改善が、夫婦間関係の改善やワーク・ライフ・バランス満足度の向上につながることもあわせて確認する。

(2) 関係性分析

父親の育児に対する母親の評価と生活満足度との関係

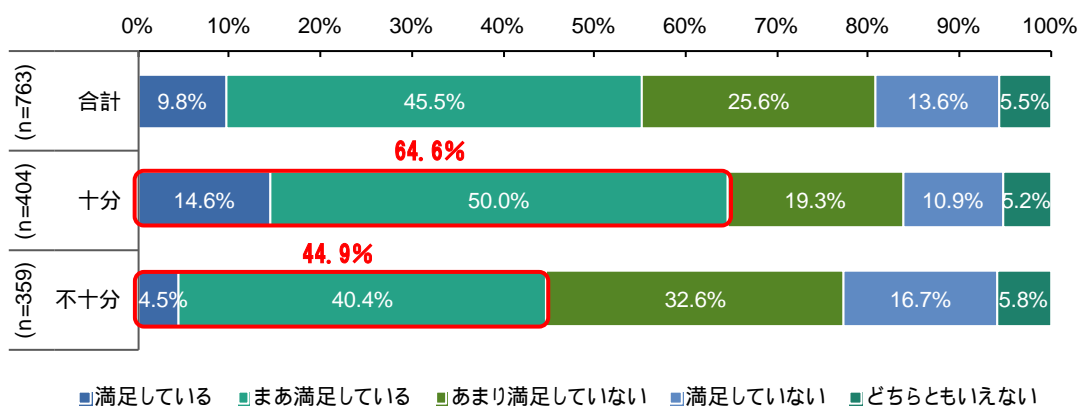
はじめに、「父親の育児に対する母親の総合評価」と「母親の生活満足度（ワーク・ライフ・バランス、父親との関係）」との関係性について分析する。分析方法としては、「父親の育児に対する母親の総合評価」を軸としたクロス集計分析を用いる。なお、集計にあたっては、父親の育児への取組みに対する母親の評価が「十分である」または「ある程度は十分である」の合計を「十分」とし、「あまり十分でない」または「不十分である」の合計を「不十分」と定義し、分析を行っている。分析結果は、図表8・9のとおりである。

父親の育児への取組みが十分であると考えられている場合、6割以上の母親がワーク・ライフ・バランスに「満足している」または「まあ満足している」と答えている。一方で、父親の育児への取組みが不十分であると考えられている場合、「満足している」または「まあ満足している」と答える母親の割合は4割程度にとどまっている。父親の育児への取組みが十分に行われている場合、母親のワーク・ライフ・バランス満足度が向上することが読み取れる。

また、同様に、父親の育児への取組みが十分であると考えられている場合、9割以上の母親が父親との関係に「満足している」または「まあ満足している」と答えている。一方で、父親の育児への取組みが不十分であると考えられている場合、「満足している」または「まあ満足している」と答える母親の割合は5割程度にとどまっている。両者では約40ptもの差が生じており、父親の育児への取組みが夫婦間関係に大きく影響を及ぼすことが読み取れる。

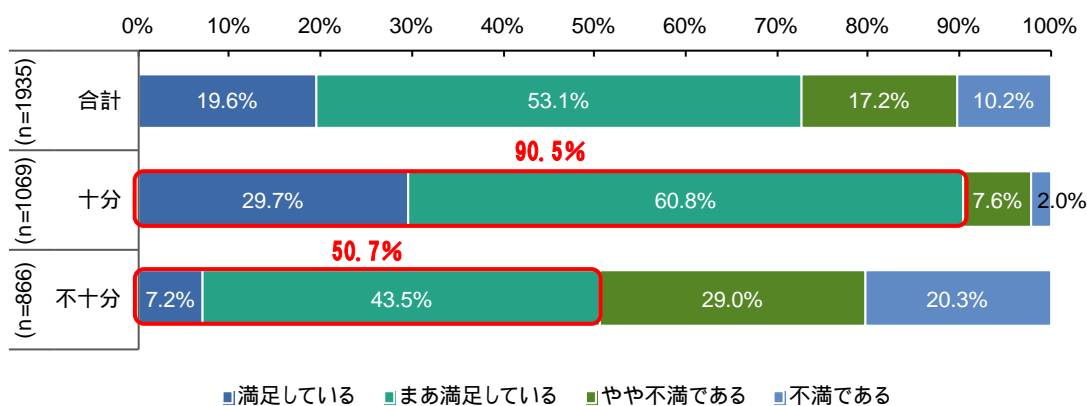
なお、図表8・図表9いずれのクロス集計分析においても、カイ2乗検定の結果は1%水準で有意となっており、「父親の育児に対する母親の総合評価」と「母親の生活満足度（ワーク・ライフ・バランス、父親との関係）」との関連性を示す結果となっている。

【図表 8】父親の育児に対する総合評価別 ワーク・ライフ・バランスについての母親の満足度



カイ 2 乗検定結果 : $p < 0.01$

【図表 9】父親の育児に対する総合評価別 父親との関係についての母親の満足度



カイ 2 乗検定結果 : $p < 0.01$

父親の育児に対する母親の総合評価と個別育児行動との関係

ここからは、「父親の育児に対する母親の総合評価」と「父親の個別育児行動に対する母親の個別評価」との関係性について統計解析を用いて分析を行うこととする。

まず、統計分析に先立ち、総合評価と個別評価の関係を外観できるよう、総合評価を軸としたクロス集計結果を確認する。クロス集計にあたっては、父親の育児への取組みに対する母親の評価が「十分である」または「ある程度は十分である」の合計を「十分」とし、「あまり十分でない」または「不十分である」の合計を「不十分」と定義し、分析を行っている。分析結果は、図表 10 のとおりである。

次に、統計分析を用いて総合評価と個別評価との関係性を確認する。分析方法としては、「父親の育児に対する母親の総合評価」を被説明変数とした、二項ロジスティック回帰分析を用いる。説明変数としては、「父親の個別育児行動に対する母親の個別評価」の各項目を設定するとともに、あわせて育児時間の影響についても確認できるよう「父親の育児時間（平日・休日）」も設定した。被説明変数としては、父親の育児に対する総合評価が「十分である」または「ある程度十分である」場合を「1」と設定した。分析結果は、図表 11 のとおりである。

～クロス集計分析の結果（図表 10）に係る解説～

< 評価している点 >

- ・ 育児への取組みが十分であると考えられている父親は、「子どもとよく遊ぶ」「子どもの日常の世話をする」について評価を受けている割合が高い（それぞれ 59.3%、45.5%）。一方で、不十分であると考えられている父親は、両項目において評価を受けている割合が、それぞれ半分以下（26.7%）3分の1以下（14.0%）に留まっており、十分であると考えられている父親に比べて 30pt 以上低い割合となっている。
- ・ 育児への取組みが十分であると考えられている父親は「子育てを楽しむ」（23.1%）「誕生日などのイベント、保育園・幼稚園などの行事に熱心に参加する」（22.6%）などの割合も高くなっている。特に、「子育てを楽しむ」についての評価の割合は、不十分であると考えられている父親と比べて 2 倍以上の値となっており、10pt 以上の差が生じている。
- ・ 育児について評価できる点が「特にない」と答えた割合についても差が大きくなっている。育児への取組みが十分であると考えられている父親の場合、評価できる点が「特にない」と回答された割合は 4% 未満だが、不十分であると考えられている父親の場合には「特にない」の割合が 3 割以上に達しており、30pt 近い差が生じている。

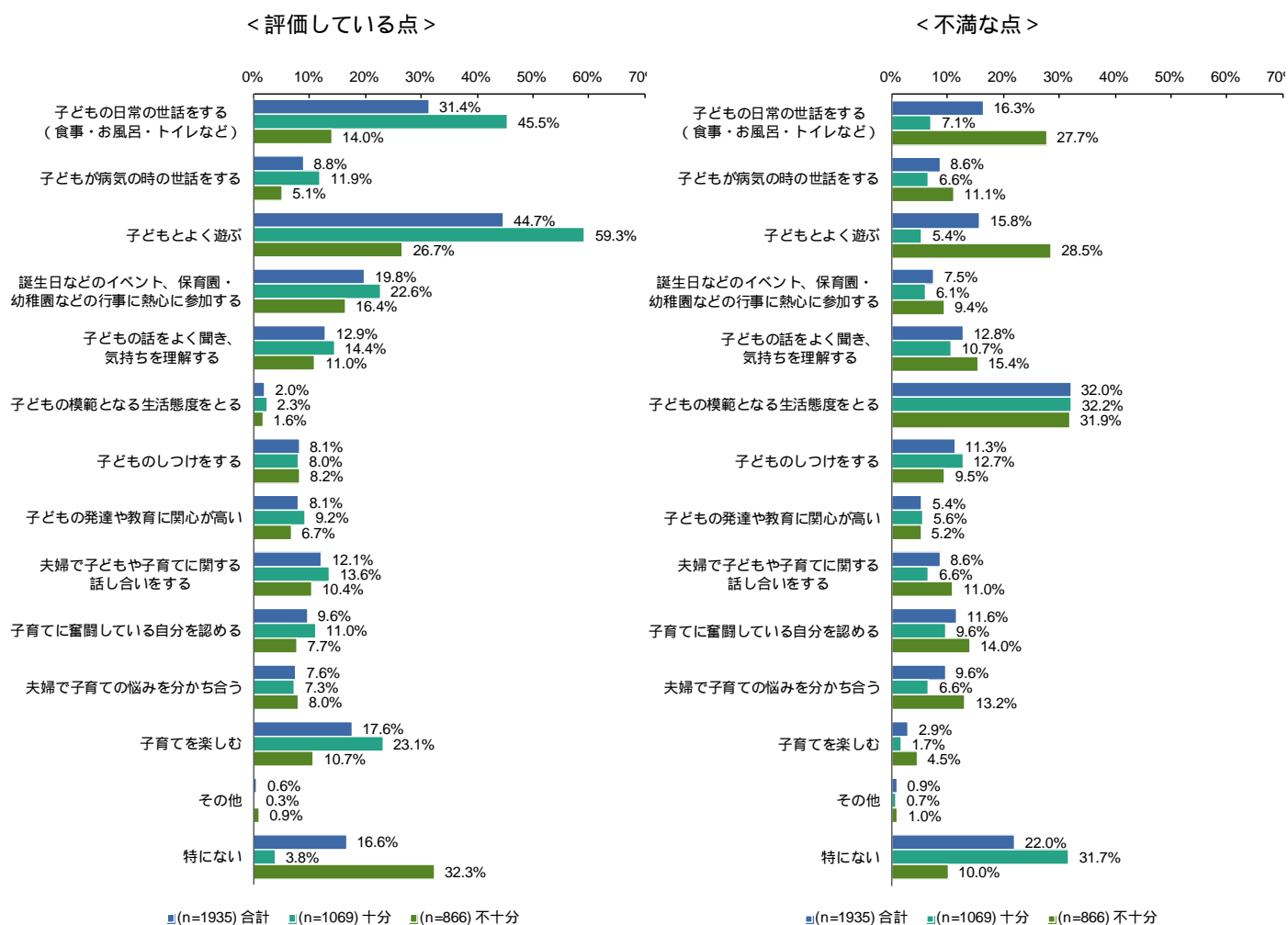
< 不満な点 >

- ・ 育児への取組みが不十分であると考えられている父親は、「子どもとよく遊ぶ」「子どもの日常の世話をする」について不満を抱かれている割合が高い（それぞれ 28.5%、27.7%）。一方で、十分であると考えられている父親は、これらの項目について不満を抱かれている割合は低く（それぞれ 5.4%、7.1%）、不十分であると考えられている父親に比べて 20pt 以上低い割合となっている。
- ・ 育児への取組みが不十分であると考えられている父親は、「子どもの話をよく聞き、気持ちを理解する」「子育てに奮闘している自分を認める」「夫婦で子育ての悩みを分かち合う」「夫婦で子ども

や子育てに関する話し合いをする」など、家族間のコミュニケーションについて不満を抱かれている割合も10%を超えている。また、十分であると考えられている父親と比べて一定程度の差が生じている。

- ・育児について不満を抱く点が「特にない」と答えた割合についても差が大きくなっている。育児への取組みが不十分であると考えられている父親の場合、不満を抱く点が「特にない」と回答された割合は10%だが、十分であると考えられている父親の場合には「特にない」の割合が3割以上に達しており、20pt以上の差が生じている。
- ・最も不満を抱いている割合が高かったのは、「子どもの模範となる生活態度をとる」だが、この項目については、育児への取組みが十分・不十分に関わらず、30%以上の父親が不満を抱かされていた。生活態度については、父親全体として改善に取り組む必要があると言える。

【図表 10】父親の育児に対する総合評価別 父親の個別育児行動に対する母親の個別評価



～二項ロジスティック回帰分析の結果（図表 11）に係る解説～

<父親の育児時間>

- ・父親の育児時間については、「平日 2 時間以上」「休日 10 時間以上」とともに、それぞれ「平日 2 時間未満」「休日 10 時間未満」に対して 1 %水準でプラスに有意であった。父親が育児に関わる時間が長い場合、育児に対する総合評価が高くなることが読み取れる。

<父親の個別育児行動において評価している点>

- ・「子どもの日常の世話をする」「子どもが病気の時の世話をする」「子どもとよく遊ぶ」「イベント、行事に熱心に参加する」「子育てを楽しむ」父親は、そうでない父親に比べて 1 %水準でプラスに有意であった。また、「子どもの話をよく聞き、気持ちを理解する」「子どもの模範となる生活態度をとる」「子どもの発達や教育に関心が高い」「子育てに奮闘している自分（母親）を認める」父親は、そうでない父親に比べて 5 %水準でプラスに有意であった。特に、「子どもの日常の世話をする」「子どもが病気の時の世話をする」「子どもとよく遊ぶ」「子どもの模範となる生活態度をとる」については、オッズ比が 2 倍を超えており、総合評価に対するプラスの影響が大きいことが読み取れる。
- ・「評価できる点が特にない」父親は、そうでない父親に比べて 1 %水準でマイナスに有意であった。オッズ比も、個別育児行動に係る各不満点に比べて低い（0 に近い）値となっており、評価できる育児行動が一つもない場合、総合評価に与えるマイナスの影響が大きいことが読み取れる。

<父親の個別育児行動において不満な点>

- ・「子どもの日常の世話をする」「子どもとよく遊ぶ」「夫婦で子育ての悩みを分かち合う」ことについて不満を抱かれている父親は、そうでない父親に比べて 1 %水準でマイナスに有意であった。また、「夫婦で子どもや子育てに関する話し合いをする」「子育てに奮闘している自分（母親）を認める」ことについて不満を抱かれている父親は、そうでない父親に比べて 5 %水準でマイナスに有意であった。特に、「子どもの日常の世話をする」「子どもとよく遊ぶ」は、オッズ比が他の項目よりも低く（0 に近く）総合評価に対するマイナスの影響が大きいことが読み取れる。
- ・「不満な点が特にない」父親は、そうでない父親に比べて 1 %水準でプラスに有意であった。オッズ比は、全項目のうち最も高い値を示しており、不満点を作らないことが総合評価を高めるうえで特に重要であることが読み取れる。

【図表 11】二項ロジスティック回帰分析の結果

	父親の育児に対する総合評価 (十分である・ある程度十分である = 1)
サンプル数	1,935
カイ二乗	964.316***
- 2 対数尤度	1696.828

(次ページにつづく)

【図表 11】二項ロジスティック回帰分析の結果（つづき）

	父親の育児に対する総合評価 (十分である・ある程度十分である = 1)	
	係数	オッズ比
父親の平日の育児時間（基準：2時間未満）		
2時間以上ダミー	0.687***	1.988
父親の休日の育児時間（基準：10時間未満）		
10時間以上ダミー	0.725***	2.064
父親の個別育児行動において評価している点（基準：評価なし）		
子どもの日常の世話をするダミー	1.307***	3.697
子どもが病気の時の世話をするダミー	0.942***	2.565
子どもとよく遊ぶダミー	0.712***	2.037
イベント、行事に熱心に参加するダミー	0.562**	1.755
子どもの話をよく聞き、気持ちを理解するダミー	0.438*	1.549
子どもの模範となる生活態度をとるダミー	0.972**	2.643
子どものしつけをするダミー	0.211	1.236
子どもの発達や教育に関心が高いダミー	0.475**	1.608
夫婦で子どもや子育てに関する話し合いをするダミー	0.352*	1.422
子育てに奮闘している自分（母親）を認めるダミー	0.506**	1.659
夫婦で子育ての悩みを分かち合うダミー	0.032	1.032
子育てを楽しむダミー	0.589***	1.802
その他ダミー	-0.972	0.378
評価している点は特にないダミー	-1.690***	0.184
父親の個別育児行動において不満な点（基準：不満なし）		
子どもの日常の世話をするダミー	-1.216***	0.296
子どもが病気の時の世話をするダミー	-0.413*	0.662
子どもとよく遊ぶダミー	-1.247***	0.287
イベント、行事に熱心に参加するダミー	-0.324	0.723
子どもの話をよく聞き、気持ちを理解するダミー	-0.109	0.897
子どもの模範となる生活態度をとるダミー	0.050	1.051
子どものしつけをするダミー	0.115	1.122
子どもの発達や教育に関心が高いダミー	0.070	1.072
夫婦で子どもや子育てに関する話し合いをするダミー	-0.487**	0.614
子育てに奮闘している自分（母親）を認めるダミー	-0.498**	0.608
夫婦で子育ての悩みを分かち合うダミー	-0.657***	0.518
子育てを楽しむダミー	-0.637*	0.529
その他ダミー	-0.429	0.651
不満な点は特にないダミー	1.591***	4.909

統制変数として、年齢、居住市区町村の規模、父母との同居・近居の有無、子どもの人数、就業形態を投入
 有意水準は、「* $p < 0.1$ 、** $p < 0.05$ 、*** $p < 0.01$ 」として設定（** $p < 0.05$ 、*** $p < 0.01$ の場合に網掛け）

4. まとめ

本レポートでは、「父親の育児に対する母親の評価と母親の生活満足度（ワーク・ライフ・バランス、父親との関係）」との関係性、「父親の育児に対する母親の評価と個別育児行動」との関係性についてそれぞれ確認した。結果として、父親の育児に対する母親の評価を高めることが母親の生活満足度の向上につながることで、母親から育児への取組みが十分であると考えられている父親と不十分であると考えられている父親とでは育児行動が異なることが分かった。育児への取組みが十分である父親と不十分である父親との違いから見た父親の育児参加におけるポイントは、以下の4つである。

- ・育児への取組みが十分であると考えられている父親は、子どもとよく遊び、子どもの日常の世話にきちんと取り組んでいた。一方で、育児への取組みが不十分であると考えられている父親は、逆に、子どもと遊ぶことや子どもの日常の世話に十分取組めておらず、これらの項目が不満につながっていた。子どもと遊ぶ・日常の世話をするなどの育児は、日常的に生じるもので発生頻度も高く、基本的な育児活動と言える。また、父親が担っている育児の状況（図表4・5）を見ても、子どもと遊ぶこと・日常的な子どもの世話に関わることは、比較的多くの父親が実践している育児活動であることが示されている。これらの基本的かつ比較的取組みが進んでいる育児について、父親に担ってほしいと希望する母親は多いものと考えられ、逆にこの点が不十分であると不満につながりやすくなってしまふ。まずは、基本の育児活動にしっかりと取組み、育児への関わりを増やしていくことが、夫婦間の信頼を高めるうえで重要な取組みの一つになるものとする。
- ・また、育児への取組みが十分であると考えられている父親は、子どもが病気の時の世話やイベント・行事への熱心な参加などの非日常的な育児についても積極的に取り組んでいた。加えて、子育てを楽しむ姿勢や子どもの話をよく聞き理解する姿勢、子どもの発達や教育への関心などを有しており、育児に対して前向きに関わっていた。これらの項目は、日常的・基本的な育児と異なり、育児行動が十分に行われていなかったとしてもすぐに不満につながるものではないが、きちんと取り組むことで確実に評価を高めることにつながる項目となっている。前向きな姿勢を持ち、基本的な育児の枠を超えて非日常的な育児についても積極的に関わることは、夫婦間関係をより一層良好なものとするうえで有効な取組みであると言える。
- ・さらに、育児への取組みが不十分であると考えられている父親は、夫婦で子どもや子育てに関する話し合いをする・子育てに奮闘している母親を認める・夫婦で子育ての悩みを分かち合うなどの項目について不満を抱かれており、育児に係るコミュニケーションに課題がある傾向が示されていた。子どもと遊ぶ・日常的な子どもの世話をするなどの直接的な育児行動に加えて、夫婦で育児に関するコミュニケーションを十分に行うことは、育児における母親の精神的な負担を軽減するうえで大切な取組みであり、重要な育児行動の一つである。直接的な育児行動だけでなく、広義の育児行動として、コミュニケーションや精神的な面にも配慮した取組みが、より一層推進されることが望まれる。
- ・最後に、育児への取組みが十分であると考えられている父親・不十分であると考えられている父親双方に言えることとして、「生活態度」に関する改善余地が大きいことが結果として示された。子どもの模範となる生活態度をとっている場合に総合評価が高まる傾向があることが分かったが、育児への取組みが十分であっても、生活態度の面で課題があると考えられている父親も多く見られた。子どもの模範となる生活態度をとることは、父親の役割として必要不可欠なことである。父親全体として、模範的生活態度を心がけることが求められる。

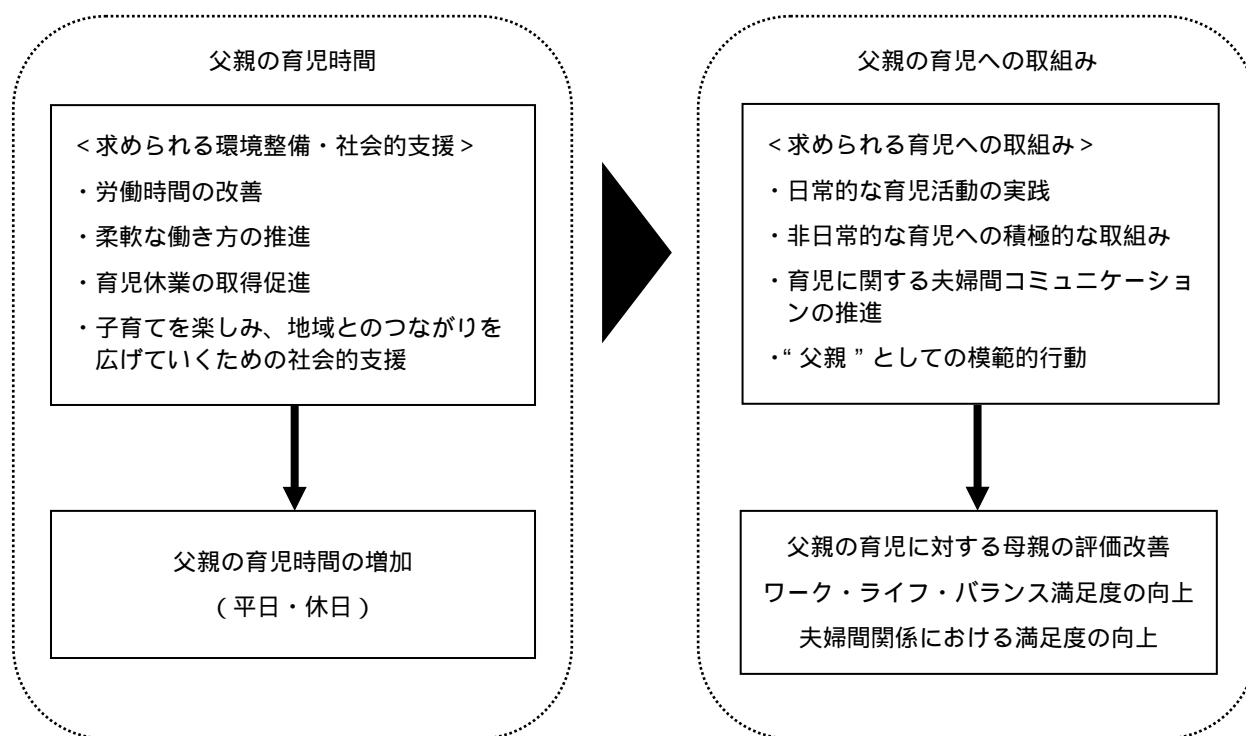
以上、父親の育児参加におけるポイントを整理してきたが、育児参加において最も効果的な行動（＝母親からの高評価につながる行動）は“育児における不満点を作らないこと”であり、“一つでも評価につながる行動に取り組むこと”である。まずは基本的な育児にしっかりと取り組み、育児に係る母親の不満点の一つずつ解消し、その中から高評価を得る行動の一つずつ作り出していくことが、母親との育児における信頼関係構築につながるものと考えられる。

基本的な育児活動を積み重ね、さらにその枠を超えて積極的に育児に関わる父親が増加し、育児に係る良好なコミュニケーションや父親としての模範的な行動を通じて、家族関係がより一層良質なものとなっていくことを期待したい。

これまでの調査結果および本調査に先行して行った「父親の育児時間に影響を与える要因分析」の調査結果に基づき、父親の育児参加の方向性について図表 12 のとおり整理する。

一連の調査結果が、父親が育児に積極的に取り組むための環境を整え、子どもと関わる時間を増やし、そしてその時間に適切な育児活動に取り組むことによって夫婦間における満足度を向上し、夫婦ともにワーク・ライフ・バランスを実現していくための一助となれば幸いである。

【図表 12】調査結果の整理



以上

(参考) 先行調査「父親の育児時間に影響を与える要因分析」の結果概要

男性の育児に焦点を当て、育児時間と「本人の就業環境などの仕事に関わる要素」「本人の考え方や地域とのつながりなどの仕事以外の要素」「配偶者に関わる要素」それぞれとの関係性について分析を実施。分析にあたっては、仕事の影響が強いと考えられる「平日」と、仕事以外の影響が強いと考えられる「休日」とを区別して分析に取組み。

分析結果から、得られた示唆は以下のとおり。

- ・父親の育児時間は、平日・休日ともに母親に比べて短い。仕事がない休日であっても、育児時間が10時間以上となる父親の割合は24.6%にとどまっており、母親(63.2%)との差は大きい。
- ・平日の育児時間は父親本人の就業環境に大きく依存する。労働時間や通勤時間が長い場合に育児時間が短くなる一方で、フレックスタイム制や短時間就業などの柔軟な働き方を選択できている場合や自営業等の場合には育児時間が長くなっていった。また、育児休業の取得経験が平日の育児時間にプラスの影響をもたらしていた。
- ・休日の育児時間は、父親本人の子育てに対する考え方や地域とのつながりなどとの関わりが深い。子育てに関わりたくない・子どもとの接し方に自信が持てないなど、子育てに対してネガティブな考えを有している場合に育児時間が短くなる一方で、子どもと一緒に家族で楽しみたいなど、子育てに対してポジティブな考えを有している場合には育児時間が長くなっていった。

「父親の育児時間に影響を与える要因分析」の詳細については、以下のページを参照

http://www.murc.jp/thinktank/rc/politics/politics_detail/seiken_160218

【参考文献】

- ・内閣府(2015)「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)レポート2014」仕事と生活の調和連携推進・評価部会、仕事と生活の調和関係省庁連携推進会議
- ・総務省統計局(2012)「平成23年社会生活基本調査 生活時間に関する結果」
- ・国立社会保障・人口問題研究所(2014)「第5回全国家庭動向調査」
- ・三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2014)「子育て支援策等に関する調査2014」
- ・三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2003)「子育て支援策等に関する調査研究報告書」(厚生労働省委託調査)

- ご利用に際して -

- 本資料は、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客様の決定、行為、及びその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客様ご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所:三菱UFJリサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡下さい。